

Daniel N. Posner,

*Institutions and Ethnic
Politics in Africa.*

Cambridge: Cambridge University Press,
2005. xv + 337pp.

えん どう みつぎ
遠 藤 貢

アフリカにおける民主化は、とりわけエスニシティとの関係でどのように理解する必要があるのか。一部の研究では、民主化を通じてもたらされた競争原理が、稀少な資源をめぐるエスニック集団間の競争を加速して国内の分極化を深め、民主化そのものを困難にする結果につながっているといった議論がなされている。例えば、アフリカにおける個人の安全という観点から、国家が安全を提供できず、また信頼醸成ができない状況が継続する限り、個人は国家よりもエスニック集団に安全提供を求めるといった構造は改善されないとして、「民主主義は危機に瀕し続ける」という悲観的な議論が存在する。また、稀少資源の配分にあたり、アフリカの国家はネパティズムに基づいて職権乱用の行われる領域であり、その配分にもエスニックな偏りが生じるためアフリカでは、エスニック集団に基づくクライエンテリズムが支配的な政治が行われてきた。したがって、統治の装置としての国家改革が行われ、エスニックな紐帯が弱められる過程が伴わない限り、アフリカにおける民主化の成功は起こりえないといった議論もなされている。上記のように、エスニシティに着目する論者は、特に国家との関係をめぐって、特定のエスニック集団の利益から距離をおいた意識に基づく官僚機構（あるいは国家）の形成を実現するための制度構築を継続的に模索することが、民主化を進める上での必要条件であることを指摘している

[Berman et al. 2004]

こうした研究に示されるように、アフリカにおけるエスニシティは民主化過程において、その進展の構造的制約条件という形で問題化されることがある。無論、エスニシティはアイデンティティのひとつの表れであり、それ自体必ずしも構造的とは言い切れないものである。言い換えれば、エスニシティはその発現において状況的であり、また時に道具的に利用されることが、近年のアフリカにおける紛争をめぐって指摘されてきたことは広く知られるところである。本書は、現在UCLAに所属する若手のアフリカ政治研究者であるボズナーが、ハーヴァード大学に提出した博士論文をもとにまとめた研究である。ザンビアを事例に制度とエスニシティの発現様式の間を精査し、特に一党制と複数政党制の下におけるエスニシティの発現様式の相違を論証し、エスニシティと一括して議論するあり方に再考を促す著作となっている。以下、その内容を検討しておきたい。

本書は以下のように構成されている。

- 第1章 序章 制度とエスニック政治
- 第 部 エスニックな亀裂構造への説明
- 第2章 ザンビアにおけるエスニックな亀裂構造の説明I 植民地期北ローデシアにおける部族アイデンティティの出現
- 第3章 ザンビアにおけるエスニックな亀裂構造の説明 植民地期北ローデシアにおける言語集団アイデンティティの出現
- 第 部 エスニックな連合構築 (Coalition-Building) の選択
- 第4章 ザンビアにおけるエスニシティとエスニック政治
- 第5章 エスニック政治の変化の様式の説明 政治制度とエスニックな亀裂の発現にかかわるモデル
- 第 部 議論の検証

- 第6章 競合する説明
 第7章 エスニックな政治キャンペーン 政治エリートの行動の検証
 第8章 エスニックな投票行動 大衆行動の検証
 第 部 ザンビアを越えて
 第9章 アフリカにおける体制変化とエスニック政治
 第10章 体制変化とアフリカを越えて

まず序章では、本書において扱うエスニシティへの視座が示される。ここでまず確認しておきたいのは、著者がエスニシティをめぐる、一般的には長期の過程であるアイデンティティ形成 (identity construction) と特定状況下での合理的な選択 (判断) としてのアイデンティティ選択 (identity choice) を区別している点である。そして、この2つの過程が特定の制度環境の下で相補的に作用して、結果的に (複数の可能性の中から) ひとつのエスニックな亀裂が発現するという議論が行われる。さらに、より一般的な文脈の議論を行いながら、エスニックな亀裂 (ethnic cleavage)、エスニック集団 (ethnic groups)、アイデンティティ・レパートリー (identity repertoires) をそれぞれ区分して検証を進めることが明記される。エスニックな亀裂は、例えば言語、人種、宗教といったアイデンティティの集合を指すものと考え、エスニック集団はこの集合を構成するアイデンティティの個別具体的な内容 (例えば、言語的には英語の話者、スペイン語の話者、人種的には黒人、アジア系人、宗教的にはカトリック、プロテスタント) を構成する範疇の人間集団と考える。そして、アイデンティティ・レパートリーは、言語、人種、宗教の具体的な内容の組み合わせから構成される集団 (例えば、英語話者の黒人でカトリック) を示している。著者が試みるのは、ザンビアにおけるアイデンティティ・レパートリーを明らかにしながら、亀裂の構造の中で多元的に形成されうる亀裂のうちのどれが、特定の制度の下で生起する政治的な競争や対立の中核として出現するかを説明することである。そして、その際にエスニックな亀裂のもとで、どのようにア

イデンティティを選択するかは、帰属する集団の相対的利得を比較するという合理的な選択を通じて行われるという議論である。また、ザンビアを事例として選ぶ妥当性について、独立時の複数政党制、1970年代初頭の一党制、90年の複数政党制という政治競争のあり方を規定する制度変更が起きていること、「部族」(ここでは伝統的首長の権威の下で組織された共同体を指すものとされている)と言語集団という2種類のエスニックな亀裂が存在すること、検証の上でのデータが入手可能であること、という3点を挙げている。

第2章と第3章からなる第 部では、本書で扱われるザンビアにおいて、独立後の政治過程において、特に政治的な連合構築にあたって、重要な意味を持つようになる「エスニック」なアイデンティティの2つの形態である「部族」と主要な4つの言語集団 (ベンバ、ニャンジャ、トンガ、ロジ) が、植民地統治の過程でどのように形成されたかが示される。その際、植民地期を扱った歴史研究を丹念に検討する作業が行われている。そして、第3章の後半においては、アイデンティティ形成における潜在的可能性でありえた都市・農村の亀裂、階級間の亀裂がどうしてザンビアにおける政治的な連合構築の上では弱い形でしか発現しなかったかについての説明がなされている。

第4章と第5章で構成される第 部では、第 部で確認したザンビアにおけるエスニックな亀裂構造が、実際にどのような形で政治的な連合構築の際に発現してくるかについて、本書の中心的な問いが示され、それを検討するためのモデル構築が行われる。本書の基本的な問いは「なぜ、どのような場合に、政治的な連合構築の上での基礎となる部族的差異と言語的な差異が発現するのか」というものである。第4章ではザンビア政治において、いかに、そしてなぜエスニシティが問題となるのかということと、またいかに政治的アクターが多面的なエスニシティを操作するのかということを示すことで分析の基礎を提供している。その上で第5章では、本書における分析の上での主要モデルが提示される。これは、なぜ政治アクターが特定のアイデンティティ選択を

行うのか、そして一党制から複数政党制に政治制度が変わったときにアイデンティティ選択の上でどのような変更を促す形になるのか、を明らかにしようとするものである。したがって、ザンビアでの3つの共和制のもとでの制度変更がどのようにアイデンティティ選択における変化をもたらしたのかを、このモデルを通じて説明することが第5章のねらいとなっている。そして、以下のような結論が導出される。一党体制下では、「部族」を単位とした政治連合構築が行われ、複数政党下では、言語集団を中心とした政治連合の構築が行われている。

第6章から第8章にかけての3つの章から構成されている第 部では、第5章においてなされたアイデンティティ選択に関するモデルを通じた説明をさまざまなデータを用いることで詳細に検証する作業が行われている。第6章では、アイデンティティの変化を説明しうる政治制度以外の他の要因（経済状況など）を排除する試みを行っている。第7章では、インタビュー調査等を通じて政治エリートの行動について検証している。第8章では、投票行動のデータをもとにして、大衆がどの候補者に投票したかについて、3つの共和政期それぞれに行われた選挙のデータを下に分析を行っている。それぞれの検証を通じて改めて第 部で得られた結論が確認されている。

第9章と第10章からなる第 部では、別の文脈において本モデルから得られた結論をどの程度一般化できるかを検討している。第9章ではケニアの事例を検証し、ザンビアでの結論を一般化することが強く支持されるとまとめている。また、第10章ではアフリカ以外でその一般化の可能性を模索しながら、エスニックな亀裂の下で生成する政治を検討するにあたっては、本書で行ってきたような（潜在的に選択されうる）アイデンティティの範囲を確定する作業を行った上で、どのような理由でその中から特定のアイデンティティが選択されるかという検討を行う2段階の過程が必要ではないかとする方法的な方向性を示唆する形で結んでいる。

本書の特徴は、エスニシティを含め多角的に存立しているアイデンティティの（潜在的な）構成要素を対象社会において明らかにした上で、その中のどれをどのような理由で選択するのかを、制度とのかかわりで明らかにしている点である。著者の喩えに従えば、多角的に存立しうるアイデンティティはトランプのカードであり、どのカードをどのような局面で選択するか、ということを検討することが重要だということになる。そうした意味では、エスニシティを構築主義的に解釈し、それをより道具的に位置づけた上で、合理的選択論と結びつける形で展開させているものであり、エスニシティをめぐる政治を検討する上での新たな研究手法を提示する興味深い著作となっている。また、方法的にも非常に手堅い検証が行われている。例えば、モデルを通して得られた発見をより実証的なフィールド調査等を駆使することでさらに検証を加えるという構成になっており、その説得力が増していると評価できる。

「エスニシティ」として理解される人間集団のあり方を「部族」と言語集団に改めて分節化している点は、それ自体それほど新しい視点ではないものの、政治制度との連関という観点から改めてなされた問題提起としては特に傾聴に値するものである。民主化を議論する際にしばしば指摘されてきたのが、複数政党制という政治的な競争を促進する制度環境の下において政党が特定のエスニック集団の支持を得る傾向が強く出てきていることであった。しかし、そこで指摘されるエスニック集団の中身に関しては、それ自体十分に検討されてきたかについては疑問が残るものであった。こうした先行研究における弱点を克服するという観点からも、本来エスニックな亀裂を回避するために導入されたと解釈されてきた一党体制下においても（ブラットンらの先行研究の分類では「競争型一党体制」の場合）[Bratton and van de Walle 1997]、実は（ザンビアの場合には）エスニックな亀裂が「部族」というレベルで発現していたという指摘や、複数政党制下ではそれが言語

集団へと変ったという発見は、非常に興味深い。

無論、その方法や議論の一般化を含め問題がないわけではない。エスニシティを構成するアイデンティティを「道具」として位置づけ、それを合理的選択論の枠組みで議論しうる環境はどのような条件の下で成立しうるのかということが必ずしも明確とはいえないことがそのひとつである。事例選択にも示されているように、ザンビアは「たまたま」この枠組みに当てはまったようにもみえる。特定のアイデンティティが政治アクターの主体的な、あるいは自由な選択の対象になりにくい場合、おそらくこの方法は限界に直面する可能性が高いと考えられる。こ

のモデルの一般化の可否は、こうした条件の明確化の作業をさらに伴う必要があると考えられる。

文献リスト

- Berman, Bruce et al. eds. 2004. *Ethnicity and Democracy in Africa*. Oxford: James Curry.
- Bratton, Michael and Nicolas van de Walle 1997. *Democratic Experiments in Africa: Regime Transitions in Comparative Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.

(東京大学大学院総合文化研究科助教授)